

Title	対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者相互影響に関する研究
Author(s)	長岡, 千賀
Citation	対人社会心理学研究. 6 p.101-p.112
Issue Date	2006
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5842
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

対人コミュニケーションにおける 非言語行動の 2 者相互影響に関する研究¹⁾

長岡 千賀(日本学術振興会・京都大学大学院教育学研究科)

同調傾向とは、対人相互作用場面において、相互作用者の非言語行動が相手のそれと同期・類似する現象である。同調傾向はこれまで多分野でさまざまな関心から個別に研究されており、体系的に概説されてこなかった。そこで本研究では、先行研究を幅広く概観した。まず、これまで研究者ごとに提案されてきた同調傾向を指す用語を整理することにより、同調傾向が人間のコミュニケーション行動のさまざまな性質・側面を映し出すことが示唆された。また同調傾向の生起に関わる要因、ならびに同調傾向がもたらす 4 つの主な影響について概説した。さらには、Hess, Philippot, & Blairy (1999)のモデルや communication accommodation 理論(例えば、Shepard, Giles, & LePoire, 2001)、長岡(2003)モデルを手がかりとして、同調傾向の 2 つの側面を浮き彫りにした。これにより同調傾向が果たす役割について考察するとともに、今後の研究の方向性について議論した。

キーワード: 同調傾向、非言語行動、情動、認知

はじめに

コミュニケーション場面において、相互作用者の非言語行動、例えば話し方や姿勢や癖などが、互いに類似する、或いは身体動作が同期して起こることがしばしば観察される(大坊, 1999)。例えば、長岡・小森・中村(2002a)は、同性の 2 人組による非対面状態での自由対話において、話者が用いる反応潜時(相手話者が発話を終了してから自らが発話開始するまでの時間長²⁾)が対話者間で類似することを示している。このように、相互作用相手との間でコミュニケーション行動が連動し、パターンが類似化していくことを、本稿では同調傾向と呼ぶ。

同調傾向はコミュニケーション場面において常に示されるわけではなく、相互作用者の共感性や社会性などの要因により変化することから、同調傾向は多くの研究者によって、円滑なコミュニケーションの指標としてみなされてきた。さらには、同調傾向はラポールをもたらしたりポジティブな対人印象をもたらしたりすることが示されてきた。このことは、同調傾向がコミュニケーションにおいて何らかの重要な役割を果たしていることを示唆している。

言語的(すなわち、記号的な)コミュニケーションと非言語的コミュニケーションを対比して考えたとき、この同調傾向は、記号的な情報伝達とは異なる非言語的コミュニケーションの特質を強くあらわしているものであると言える。そのため、同調傾向は多彩な学問分野で関心が持たれ研究の対象となり多くの知見がもたらされてきた。しかし、同調傾向は非常に多彩な非言語行動に観察される現象であり、また、複数の学問分野でさまざまな関心から個別に研究が行われてきたため、これまで同調傾向を系統的に記述する試みは数少なく(たとえば、Feldstein & Welkowitz, 1978; 大坊, 1985; Cappella, 1981; Hess, Philippot, & Blairy, 1999)、その概説範囲も限られてき

た。そこで本研究では、幅広い分野・観点から先行研究を概観することにより、同調傾向を俯瞰することを目的とする。

同調傾向をさすさまざまな呼び名

同調傾向は非常に多様な形で現れる。ここでは、これまでの研究においてどのような用語が用いられてきたかを整理しながら、同調傾向がどんな現象を含むかを明確にするとともに、同調傾向がどのような性質を持っているか推察することを試みる。

なお本稿では、同調傾向と、同調行動(conforming behavior)、すなわち、集団や他者の設定する標準ないし期待に沿って個人が意見、態度、行動などを変えることをはっきりと区別し、前者を扱う。同調傾向は、それが生起する場面をコミュニケーション場面に限っていること、および、生起するのをコミュニケーション行動に限っていることが特徴である。

表情・姿勢・癖

新生児模倣(neonate imitation)とは、生後直後から観察される新生児による大人の舌出しや口の開閉の模倣のことである。一方、大人が相互作用相手の顔面表情と同じ顔面表情をすること(Gump & Kulik, 1997)や、写真などで他者の表情刺激を見せられた実験参加者が、その表情と同じ表情を作るための顔面筋の電位活動を示すこと(たとえば、Vaughn & Lanzetta, 1980, 1981; Dimberg & Lundqvist, 1988; Lundqvist, 1995; Hess, Philippot, & Blairy, 1998。ただし、実験上はコミュニケーション場面とはいえない。)は、mimicry という用語で呼ばれる(Lundqvist, 1995; Hess et al., 1998)。mimicry は、動物が他の動植物体や無生物体に似た色彩や形あるいは姿勢をもつことを指す生物学的用語とし

て知られている。ここではシャクトリムシが小枝に似るように目立たなくなるような隠蔽的擬態に見立てられている。こうした意味の用語が顔面表情の同調傾向を呼ぶ際に用いられることは示唆的であり、この現象が動物の本能的行動であることを推測させる。Lakin, Jefferis, Cheng, & Chartrand(2003)では、人類は *mimicry* によって共同社会の中で生きることに対応してきたと考え、自動的な *mimicry* に進化的ルーツを見出している。また近年、カメレオン効果という用語で、現在の社会的環境における他者の顔面表情や姿勢や癖(顔をこする、足をゆするなど)或いはその他の行動にあう(*match*)ように自らのそれを変えるような、受動的で自動的、無意識的 *mimicry* を呼んでいる研究者(たとえば、Chartrand & Bargh, 1999)がおり、この用語からも同様の推察ができよう。

心理臨床のカウンセリングや教育場面で、クライアントとセラピスト、教育者と生徒の姿勢が互いに一致することが観察されており、この現象は *congruence*, *mirroring*, あるいは *posture sharing* と呼ばれる(たとえば、Schefflen, 1964)。 *postural synchrony*, *mimic* などの用語を用いる研究者もいる(それぞれ、LaFrance, 1979; Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe, 1996)。

身体動作・呼吸

Condon & Ogston(1966)や Kendon(1970)は、話し手の音声の流れに同期して、話し手や聞き手の身体動作が連動して起きること、ならびに話し手と聞き手の身体動作が同期することを観察し、 *synchrony* や *interactional synchrony* という用語で呼んでいる。そのほかのコミュニケーション・チャンネルでは形や時間長の一致や類似を問題としているのに対して、ここでは同期を問題とする。そのほかのチャンネルの同調傾向をもたらす根本となる現象である可能性が推測される。この話し手の音声と聞き手間の身体動作の連動は、乳児と養育者の相互作用において観察され (Condon & Sander, 1974; Bernieri, Renznick, & Rosenthal, 1988)、エントレインメント(*entrainment*)と呼ばれる (Klaus & Kennell, 1976)。Condon & Sander(1974)は、生後 12 時間齢から 2 日齢、または 14 日齢の新生児と成人の相互作用を撮影し 1 コマずつ分析し、新生児の身体の各部位(頭、肘、肩、尻、足)が、大人の発話に同期しながら動くことを示した。*entrain* の「列車に乗せる」という意味から、外界の流れに受動的に引き込まれる或いは能動的に外界に合わせるという両方のニュアンスを読み取ることができよう。

また、呼吸の変化点が対人間で同期することが、音楽の共演や聴取場面や対話場面で観察されている(中村, 1995、長岡・小森・中村, 2000、渡辺, 1998)。引き込みやエントレインメントという用語で呼ばれる(渡辺, 1998; 渡辺・大久保・黒田, 1997)。

パラ言語

パラ言語における同調傾向は、 *congruence*, *convergence*, *symmetry* などの用語が用いられてきた。また、同調傾向にいたるまでの調整の過程を *accommodation*, *interactional adaptation*, *interactional accommodation*, *Coordinated Interpersonal Timing* と呼ぶ研究者もいる(それぞれ、Giles & Smith, 1979; Garvey & BenDebba, 1974; Jasnow & Feldstein, 1986; Jasnow, Crown, Feldstein, Taylor, Beebe, & Jaffe, 1988)。

パラ言語の同調傾向に関する研究のうち、特に異文化間コミュニケーションを扱う研究のほとんどは *Communication Accommodation* 理論(例えば、Giles & Smith, 1979)に基づいて行われている。*Communication Accommodation* 理論では、話者が普段使う言語やアクセントなどの発話様式を、異なる発話様式で話す他者に会ったときに、調整するという過程を含んでいるため、 *convergence*(収斂)や *accommodation*(調整・輻輳)のような用語が用いられる。Giles & Smith(1979)では、 *convergence*、すなわち収斂ばかりでなく、相手とはまったく違うように変化する反収斂(*divergence*)や、相手に応じて変えることなく話者独自のコミュニケーションパターンを用いること(維持; *maintenance*)についても扱われる。

そのほか

そのほかにも、同化行動という用語でイントネーションなどの模倣を呼ぶ研究者(内藤, 2001)もあるが、この用語は主として同調行動を扱うため注意する必要がある。また、2 者の会話において、自己開示の程度、すなわち言語を介して自分に関する情報を伝達する程度が、2 者の間で均衡する現象がある(小川, 2003)。しかし、本稿では、物理的に計測できる、客観的な指標になり得るコミュニケーション行動に観察される一致や類似、同期に話を限定し、これを同調傾向と呼んで概説を進める。

以上見てきたように、同調傾向を指す用語は多様であり、それぞれの用語が含蓄するニュアンスは示唆的である。同調傾向が、人間のコミュニケーション行動のさまざまな側面を映し出すきり口となることが示唆される。

同調傾向に影響する状況・個体要因

発達の初期段階に観察される同調傾向は、新生児模倣やエントレインメントのように、外界の刺激に対して反射的に同調するといった短時間で生起する単純な性質のものであるが、発達に伴い、同調傾向を示すコミュニケーション・チャンネルが多様化し、程度も増大するとともに、その表れ方や特性は複雑になる。ここでは、成人の相互作用で観察される同調傾向の生起や強さを左右する要

因を特定する研究を紹介する。

状況要因

相互作用相手と同じ立場にあるかそれとも異なる立場にあるかについての認知は、表情の同調傾向を左右する要因のひとつである。Gump & Kulik(1997)は、同じ実験に参加していると教示された 2 人組の実験参加者と、互いに異なる実験に参加していると教示された 2 人組の実験参加者による相互作用における、相手の顔を見る、笑う、顔をしかめる行為の時間長を計測した。互いに同じ実験に参加していると信じている者同士のほうが、互いに異なる実験に参加していると信じている者同士よりも、表情を模倣しあうことが示された。

相互作用相手と協同関係にあると認知しているか、競争関係であると認知しているかによっても、表情や姿勢や身体運動の同調傾向は変化する。Lanzetta & Englis(1989)は、実験参加者に、もう一人の人物とゲームを協力的または競争的にやらせ、そのときの実験参加者の顔面筋電位を計測した。そのゲームが協調的であると信じている実験参加者は相手の表情と似た顔面筋電位を示すが、ゲームを競争的と考えている実験参加者は相手の表情とは正反対の表情、すなわち相手が笑顔なら実験参加者は苦痛を示す顔面筋電位を、一方、相手が苦痛の表情を見せれば実験参加者は笑顔特有の顔面筋電位を示すことを示した。相互作用の質(ここでは協力的か競争的か)が、表情の模倣の方略に影響していると考えられる。また Bernieri et al. (1996)は、旅行行程を計画するなどの協調的な対話では、強いラポールを形成する話者同士ほど、姿勢を模倣したり動きが同期したりしやすいが、ディベート場面では身体運動の同期や姿勢の一致とラポールとの関係は認められないとしている。

話題にしている内容が対人的かどうかなども、姿勢の同調傾向を変化させる要因のひとつである。Charny(1966)は、女性とカウンセラーとの間の面接において、姿勢の一致は、対人的な内容や肯定的な内容、具体的な話をしているときに観察されやすく、逆に、自己中心的で、否定的、具体性のない内容を話しているときには姿勢の不一致が観察されやすいことを示している。

Welkowitz, Feldstein, Finkelstein, & Aylesworth(1972)は、相手のパーソナリティが自分と似ていると認知しているときの方が、似ていないと認知しているときよりも、声の大きさが相手に類似することを示した。彼らは、初対面の大学生により行われた自由対話において、相手と自分の性格が似ていると信じている実験参加者群の対話において、性格が異なると信じている実験参加者群や互いの性格について教示されなかった実験参加者群よりも、2者の声の大きさの差が小さいことを示した。この実験では実際には、どの群のペアもパーソナリティ

に関わらずランダムに組み合わせられていた。

このような知見を踏まえ、相手に対する受容的な構えが非言語的行動の同調傾向を促進するという仮説をたて実証した研究がある(Nagaoka et al., 2005; 長岡・小森・Draguna・河瀬・結城・片岡・中村, 2003)。実験では、話者が相手に対して受容的構えを持つ対話として、意見の異なる2者が話し合いによって妥協点を見出す条件(聞き入れ条件)を設定し、一方、話者が相手に対して受容的構えを持たない対話として、意見の異なる2者が自らの意見を相手に主張する条件(意見固持条件)を設定した。収録された15分の対話音声から発言長、反応潜時、相槌頻度を測定し、それぞれが同一ペアの2者の間でどの程度2者間で一致しているかを、条件間で比較した。その結果、すべてのパラメータが、聞き入れ条件における方が意見固持条件よりも互いに一致していることが示された。

また、相互作用回数が増えること、ならびに、相互作用の時間経過も同調傾向を強める要因である(例えば Feldstein, 1968; Natale, 1975b; Welkowitz, Cariffe, & Feldman, 1976)。Charny(1966)は、白人女性とカウンセラーとの間の面接において、カウンセリングの面接が進行するにつれ、姿勢の一致がより長い時間生じるようになることを示している。面接を時系列的に8等分に区分し、それぞれにおいて姿勢の一致が認められる時間間隔を計測した結果、面接が進むにつれ、姿勢一致の時間間隔が長くなっていくことを示した。前述の Nagaoka et al.(2005)の結果も、時間経過に伴って同調傾向の程度が強くなること、さらには、同調傾向は対話のごく早いうちから示されることを示している。

また、長岡・小森・中村(2002b)は、反応潜時を相手に合わせるために調整する過程を詳細に示すデータとして興味深い。この実験では、あらかじめ台詞が決まっている模擬対話において、一方の話者の反応潜時をアプリケーションを用いて操作し、実験参加者の反応潜時が時系列的にどのように変化するかを調べている。結果から、話者の反応潜時が、相手の反応潜時に同調するようにつくると、或いは話者の社会的スキルの高さによっては素早く変化する過程が示された(詳細は後述)。

個体要因

精神的疾患によって、同調傾向を示さないことがある。Matarazzo(1965)は、精神的に正常な者の発言長は、面接者の発言長の伸縮に応じて伸縮するのに対して、精神分裂症患者の発言長は、面接者の発言長の伸縮に応じて伸縮しないとしている。また、Condon & Ogston(1966)は、失語症患者と一般成人との相互作用において、失語症患者には発話のフローと身体運動の個人内同期が観察されないため、対人間同期も観察されないことを

示している。

疾患ではなくても、社会性に関わるさまざまな個体要因が同調傾向に影響する。共感性は、そのうちの1つである。共感性には、2つの要素、すなわち、情緒的共感性(他人が情動状態を経験しているまたは経験しようとしていることを知覚したために観察者にも生じた情動的な反応とされる)と認知的共感性があるが、それぞれが影響するコミュニケーション・チャンネルは異なるといえるかもしれない。

情緒的共感性は、姿勢や体の動きなどの同調傾向に影響するとも言えるかもしれない。Schmais & Schmais(1983)は、ダンスセラピー専攻生の想像性・共感性(fantasy/empathy)の能力と、視覚的に呈示された情緒的なダンスをするダンサーの動きを正確に模倣する能力との間に正の相関があることを示した。また、Sonnby-Börjstom, Jönsson, & Svensson (2003)は、情緒的共感性と表情の模倣との間の関連を示している。情緒的共感性が高い人は56msecという非常に短い時間の顔面表情の呈示に対して呈示された表情と同様の顔面筋電位を示すに対して、得点が低い人は示さないことを示している。

一方、認知的共感性は、癖や周辺言語の同調傾向を左右するとも言えるかもしれない。他者の立場に置かれた自分を想像することにより他者の情動を推論する能力であり、認知的共感性により関係が深い、視点取得の能力は、癖の模倣に関連することが示唆されている。Chartrand & Bargh(1999)は、視点取得能力と癖の模倣とが関係することを示している。Chartrand & Bargh(1999)では、視点取得能力が高い人は、能力が低い人よりも、写真描写課題をともに行うほかの実験参加者(実際は実験協力者)の顔をこする、足を揺するなどの癖を模倣しやすいことが示された。しかし同時に、情動的で感情的な共感を意味する共感的配慮の能力は癖の模倣の程度に影響しないという結果も得ている。また、Staples & Sloane(1976)は、症状の軽いクライアントのカウンセリングにおいて、カウンセラーの共感性の能力が高いほど、発話内潜時や反応潜時の時間長がクライアントのそれと一致する。

また、性役割が同調傾向の程度に影響していることが示されている。LaFrance & Ickes(1981)は、待合室における初対面の2者の相互作用における姿勢のミラーリング(鏡のような位置関係である)に、性別および性役割が影響することを示している。結果から、例えば、女性性的な女性のペアのほうが、男性性的な男性のペアよりも姿勢のミラーリングを示しやすいことが示された。女性の方が男性よりも情緒的共感性が高いこと(Mehrabian & Epstein, 1972)を考慮すれば、LaFrance & Ickes

(1981)は、情緒的共感性が同調傾向に及ぼす影響を反映していると解釈することも可能である。

また、個人の行動や性格がその社会においてどの程度望ましいと考えられているかをさす社会的望ましさ(吉川, 1999)も、同調傾向に影響する要因の1つである。Natale(1975b)は、同性の大学生同士の自由会話において、個人の社会的望ましさが反応潜時の一致と正の相関があること、つまり、社会的望ましさが高いほど反応潜時が相手のそれと一致することが示された。社会的望ましさは、承認欲求(他者に自分の存在を認めてもらいたい、あるいは自分の考え方を受け入れてもらいたいという欲求)が高いことから(吉川, 1999)、このことから、Natale(1975b)は承認欲求と同調傾向の関係を示すと解釈することもできる。社会的望ましさは声の大きさの同調傾向にも影響することがNatale(1975a)で示している。

また、社会的スキルやセルフモニタリング能力も反応潜時の同調傾向に影響を及ぼす(長岡・小森・中村, 2003; 長岡・小森・中村, 2002b; Cheng & Chartrand, 2003)。社会的スキルとは、他者との間の社会的課題を円滑に遂行するために必要な能力や技能である。結果から、両話者とも社会的スキル得点が高いペアほど、受容的構えを持っているときには反応潜時の同調傾向を示すのに対し、受容的構えを持たないときには相手の反応潜時とは全く異なる反応潜時を用いる傾向が示された。

同調傾向がもたらす効果

前章では、さまざまな社会的な状況・個体要因が同調傾向の生起に影響していることを概観した。それでは、非言語行動の同調傾向が、結果的に、コミュニケーションにおいて何らかの効果をもたらすということはあるだろうか。

乳児期における同調傾向は、他者とのコミュニケーションの原始的な方法であり(Meltzoff & Moore, 1994)、後の相互作用のための準備の役割(Condon & Sander, 1974)を担っていると考えられている。

一方、成人の同調傾向に関しては、これまで、さまざまな研究者がさまざまな観点からその効果について述べてきた。ここでは、先行研究を広く概観することにより、成人によるコミュニケーションにおける同調傾向がもたらす影響として、主に3つあげる。第1に、相互作用相手の内面を理解を促進すること、第2に、共感性を伝達しラポールを形成すること、第3に、話者の性格や態度がポジティブに感じさせることである。そのほかにも、音楽の共演などにおける相互作用者(歌手と伴奏者、或いはピアノ連弾の2演奏者など)間の協働を促進したり、老人や子どもに対する言語的メッセージをわかりやすくしたりすることが指摘されている(中村・長岡, 印刷中)。以下では、上記の主な3つの影響について順に概観する。

相手の内的状態の理解

他者の表情刺激を見せられた実験参加者は、その表情と同じ表情を作るための顔面筋の電位活動を示すことが報告されている (Vaughn & Lanzetta, 1980, 1981; Dimberg & Lundqvist, 1988; Lanzetta & Englis, 1989; Lundqvist, 1995; Hess et al., 1998)。顔面筋と腺の活動の生得的な反応パターンの中枢へのフィードバックの結果として、感情が生じると考えられるため (Tomkins, 1982)、他者の表情の模倣は他者の内面の理解を導くと考えられている。

情緒的な音声表現の場合も、同様に考えられる。例えば、幸福や悲しみなどの情動を表出するスピーチ音声を聞いた実験参加者は、そのスピーチが表出したのと同じ情動を表出するような話し方をする (Neumann & Strack, 2000)。そして、これは、他者の内的情動と同じものを体験することを導くと考えられる。テープレコーダーの音声を模倣するだけで、情動に変化があることを示す研究がある (Hatfield, Hsee, Costello, Weisman, & Denny, 1995)。彼らはこの結果から、音声的フィードバックは顔面表情や姿勢に影響し、さらには情動に影響すると考えている。

以上のように、同調傾向によって、我々は相手の内的状態と同じ状態を体験し、相手の内面を理解することがある。このように、他者の顔の表情や音声、姿勢、動きを自動的に模倣し、同期し、結果として情動的に他者と一致する傾向は情動伝染 (emotional contagion, mood contagion) と呼ばれる (例えば、Neumann & Strack, 2000; Sonnby-Börgstom et al., 2003)。新生児でさえ、他児の泣き声を聞くとつられるようにして泣くことがあることから、コミュニケーションを通じた相互作用相手の内面理解の基本的な方法は、その基本的な方法は新生児の頃から芽生えていると考えられる。

共感の伝達とラポールの形成

カウンセリング場面においては、カウンセラーがクライアントに対して共感を示すことが重要である (Rogers, 1957)。Maurer & Tindall (1983) は、姿勢の同調傾向が、カウンセラーの共感性についての評価を向上させることを、実験的に示した。彼らは、高校生をクライアントとした生涯計画などについてのカウンセリングにおいて、カウンセラーがクライアントの姿勢を一致させる条件と、一致させない条件を設けた。クライアントは、カウンセリング後にカウンセラーによって表出された共感のレベルについて評定した。結果から、姿勢を一致させた方が、させない条件よりも、カウンセラーの共感性が高く評価されることが示された。

ラポールは、カウンセラーがクライアントに対して共感的、受容的態度で接することによって築かれる、治療に

有効な治療者とクライアントの間の人間関係であり、ラポールを形成することはカウンセリングにおける治療の第一歩であると考えられている。ダンスセラピーでは、クライアントとの関係を築くための手段として体の動きを模倣することが基本的手段とされており (Schmais & Schmais, 1983)、クライアントの体の動きを真似して共感を表現することによってラポールを導くことができると考えられている。精神分析的ダンスセラピーの事例を報告し姿勢の一致と共感性との関連について考察する研究 (Siegel, 1995) もある。

姿勢の同調傾向がラポールの形成に関係することを示す研究もある。Bernieri et al. (1996) は、旅行行程を計画するなどの協同的な対話では、強いラポールを形成する話者同士ほど、姿勢を模倣したり、動きが同期したりしやすいことを示した。さらには、観察者によっても、身体運動の同期や姿勢の一致が多いペアほどラポールが高いと評価されることを示した。また、授業の指導者と生徒の姿勢の一致と、生徒によるラポールの評定値との間に正の相関があることを示している (LaFrance, 1979)。

しかし、相手に姿勢を一致させれば必ずラポールが形成されるというわけではないことに注意したい。LaFrance & Ickes (1981) は、待合室における初対面のもの同士の相互作用において、姿勢の同調傾向と、ラポールとの間に負の相関があることを示している。逆に、発言時間や頻度とラポールとが正の相関を示した。これらの結果から、彼らは、待合室における初対面の人との相互作用においては、姿勢の同調傾向ではなく発言の方が適切な相互作用の手段であると解釈し、相互作用の文脈に応じて適切な行動が異なると考えている。

ポジティブな対人印象

一般的に、同調傾向を示す人物はポジティブに評価される。

異文化間コミュニケーション場面におけるアクセントや使用言語、或いは反応潜時や発話速度の同調傾向は、話者の有能性や知性に関する評価に影響することが、社会言語学の分野で繰り返し示されている。例えば、雇用面接場面において、面接者が使う言葉に合わせて自分のアクセントを変化させる被面接者は、相手に関わらずアクセントを変えない被面接者や相手と異なる土着のアクセントを使う被面接者よりも、観察者によって、知性的で教養があると評価される (Bourhis, Giles, & Lambert, 1975)。香港における中国式の結婚式で行われた対話において、普通話 (中国の公用語) を話す香港人は、広東語 (香港で通常使われる言葉) を話す香港人よりも、中国大陸にアイデンティティーを持つ話者によって、ポジティブに評価される (Tong, Hong, Lee, & Chiu, 1999)。母国語が互いに異なるセールスマンと客との対話において、

セールスマンおよび客の言語の選択を操作した音声を第三者(評定者)に評定させた場合、言語の選択と評定者の言語的背景が、話者の印象評価に影響する(Genesee & Bourhis, 1982, 1988)。

また、発話速度や反応潜時の同調傾向を示す話者ほど、対話相手によって、能力や社会的魅力を高く評価される(Street, 1984)。Gregory, Dagan, & Webster(1997)および Gregory, Green, Carrothers, Dagan, & Webster(2001)は、音声の基本周波数が同調傾向を示す対話者の方が同調傾向を示さない対話者よりも、社会的で活動的であると、観察者によって評定されることを示している。Feldstein, Dohm, & Crown(2001)は、スピーチの聞き手は、自分とだいたい同じ発話速度で話す話者をより有能でより魅力的に感じる傾向があることを、聴取評定実験と音読の分析によって示している。

反応潜時の同調傾向は、対人印象の中でも特に、「好きな」、「親しみやすい」などより個人的な親しみやすさの側面を促進すると言えるかもしれない。たとえば、初対面の大学生によっておこなわれた会話において、反応潜時が2者間で類似しているほど、観察者により、温かいと認知される(Welkowitz & Kuc, 1973)。また、長岡・Draguna・小森・中村(2002)では、テレフォンショッピング場面の対話音声におけるオペレータの接客の態度の印象が、反応潜時の同調傾向によって変化するかどうかを検証した。聴取評定実験の結果から、客の反応潜時が長い場合には、長い反応潜時を用いるオペレータの方が短い反応潜時を用いるオペレータよりもポジティブに評価されるが、客の反応潜時が短い場合には、短い反応潜時を用いるオペレータの方が長い反応潜時を用いるオペレータよりもポジティブに評価されることが示された。オペレータの接客態度は、「親しみやすい」や「感じのよい」などの個人的な親しみやすさの側面と、熟達度や落ち着きをあらわす側面との2側面から評価されることが考えられるが、反応潜時の同調傾向は後者ではなく、前者に関連することが興味深い。反応潜時の同調傾向はより個人的なつながりを作るための手がかりとなっていることが推察される。

反応潜時と同様に、癖や姿勢の同調傾向も個人的な親しみやすさと関連することを示す研究がある。例えば顔をこする、足を揺らすなどの同じ手癖を持つ相互作用相手のほうが、同じ手癖を持たない相手よりも、好意的に評価される(Chartrand & Bargh, 1999)。Chartrand & Bargh(1999)は、実験参加者と実験協力者が協同的に写真に描かれているものを記述する課題を行う状況において、実験協力者が実験参加者の癖や姿勢や動きを模倣する条件と、模倣しない条件を設けた。実験協力者

は、両条件において、実験参加者に笑い顔を見せたり視線を向けたりせず、中立的な表情であった。実験参加者に実験協力者に対する好意を評価させたところ、実験協力者が実験参加者を模倣する条件における方が、模倣しない条件よりも、実験参加者は実験協力者を好きであると感じることが示された。さらに、実験参加者に相互作用の円滑さを評価させたところ、実験協力者が実験参加者を模倣する条件における方が、模倣しない条件よりも、相互作用が円滑に進んだと評価することが示された。

姿勢や動きの同調傾向については、このほかにも、スポーツ指導や面接場面において、同調傾向を示す者へのポジティブな印象や互いの類似性、自分と相手と関係についての評価を高めることが示されている(Bates, 1975; Navarre, 1982; LaFrance & Brodbant, 1976)。

しかし、姿勢の同調傾向を示す人物が常にポジティブに評価されるわけではない。Bates(1975)によると、大人は、子どもによる大人の姿勢の模倣が、第3者からの強要によるものであることを知ると、その子どもに対して高い評価をしなくなる。

また、対話相手の話し方をすべて真似すれば必ずよい印象を与えるというわけではなく、最適な同調傾向があることを指摘する研究者がいる(Giles & Smith, 1979; Berger & Bradac, 1982)。Giles & Smith(1979)は、2人の話者による対話において、一方の話者は、他方の話者の発話内容と発話速度には合わせるが発音(pronunciation)は合わせない場合のほうが、発話内容と発話速度と発音全てを合わせた場合よりも、第3者によって好ましいと評価されることを、実験的に示している。

同調傾向研究の俯瞰と今後の課題

以上の先行研究の概観を踏まえ、同調傾向の性質を考究すると、同調傾向の2つの側面を浮かび上がらせることができよう(Figure 1)。第1の側面は、情動的、自動的、先天的側面である。この側面を強くあらわしている具体例は、新生児の顔模倣、成人による表情模倣や感情を表出する音声表現に対する模倣である。第2の側面は、認知的、後天的側面である。この側面をあらわす具体例は、反応潜時や発言長の同調傾向や、使用言語やアクセントの同調傾向である。前者と対照的に、これらには社会的な要因が介在する。

この2つの側面を、同調傾向を示すコミュニケーション・チャンネルに大まかに対応付け、さらにそれに、同調傾向に影響する社会的要因、同調傾向が観察される発達段階、同調傾向がもたらす効果に対応付けることにより、2側面の対比をより明確にすることができる。Figure 1では、同調傾向を示すコミュニケーション・チャンネルや、同調傾向に影響する社会的要因、同調傾向が観察される

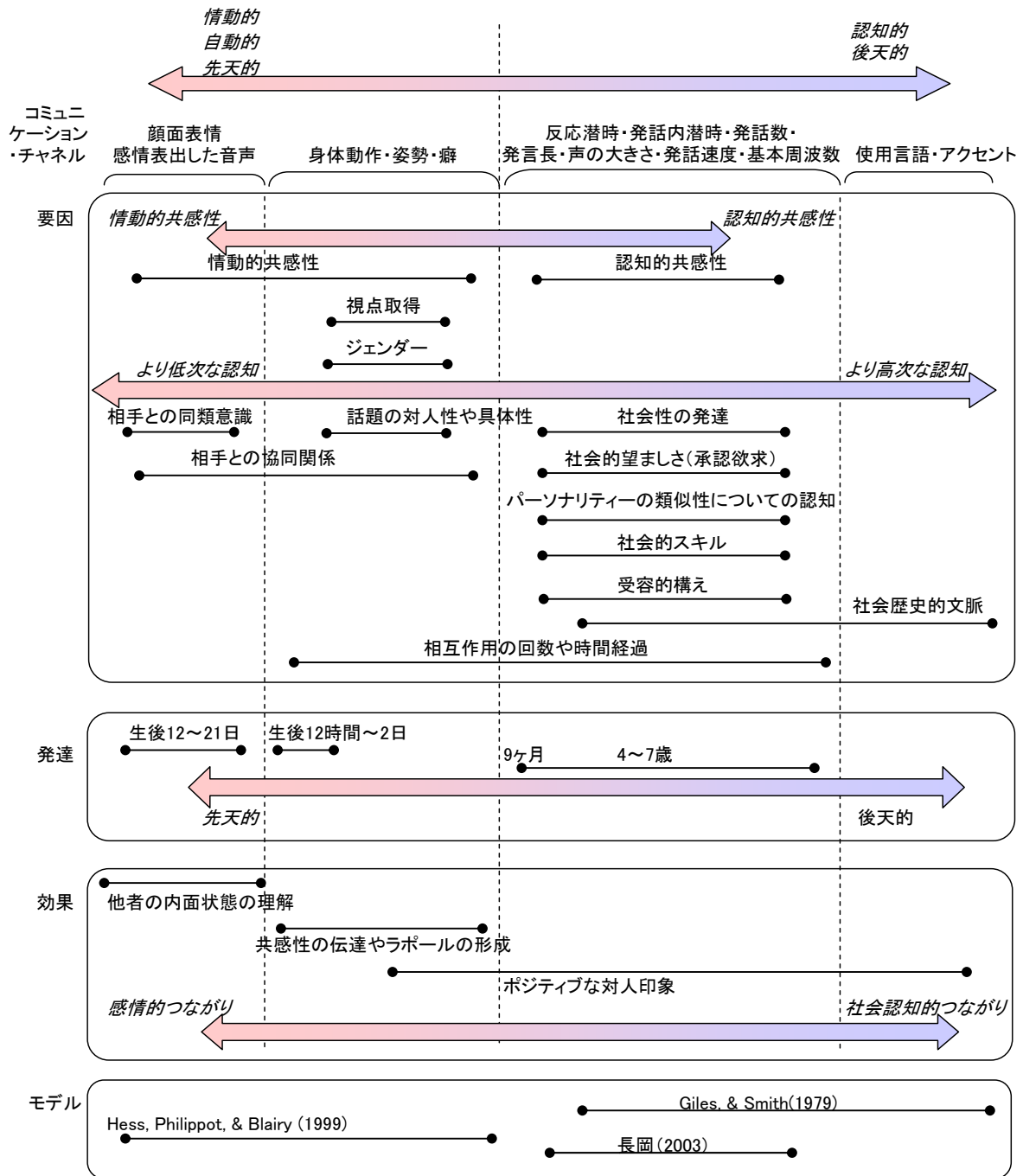


Figure 1 同調傾向研究の俯瞰

発達段階、同調傾向がもたらす効果を、概ね左から連続的に、情動的、自動的、先天的なものから認知的、後天的なものへと移行するように配置して記した。情動的、自動的、先天的な同調傾向を示しやすいコミュニケーション・チャンネルは、先行研究をまとめれば、主に顔面表情、感情表出に関わる音声表現、姿勢などであると考えられる。また、これらのチャンネルに影響する社会的な要因は、先行研究の知見をまとめれば、共感性の中でも特に情動的な共感性であり、相手と同じ実験に参加しているかどうか

かについての認知(Figure 1 では、相手との同類意識と記した)などの比較的単純な社会的認知である。また発達の初期段階で観察される新生児の顔の模倣などにこの側面が強くあらわれている。そしてこれらのチャンネルが示す同調傾向がもたらす効果としては、他者の内面状態の理解や、共感性の伝達やラポールの形成などであるため、この側面は、他者とのより感情的なつながりをもたらす機能を有していると推測される。

一方、認知的、後天的側面の同調傾向を示しやすいコ

コミュニケーション・チャンネルは、先行研究をまとめれば、主に反応潜時や発言長さや声の大きさなどや、使用言語やアクセントなどであると考えられる。また、これらのチャンネルに影響する要因は、先行研究の知見をまとめれば、共感性の中でも認知的な共感性や、社会的望ましさや受容的構えなど比較的複雑な社会認知的な要因、また、発達の過程で獲得する社会性や社会的スキルなどである。また発達の観点から言うと、反応潜時や発話内潜時の同調傾向は、幼児の発達に伴って観察され始める。そして、これらのチャンネルが示す同調傾向は、ポジティブな対人印象を効果としてもたらし、他者との社会認知的なつながりをもたらす機能を持っていると推測される。

この対比は、従来提案されている Hess et al.(1999)の mimiry モデル、ならびに前述の Communication Accommodation 理論(例えば、Giles & Smith, 1979; Shepard, Giles, & LePoire, 2001)や、長岡(2003)が新たに提案するモデルを関連付けることによってより明確になる。

Hess et al.(1999)のモデルは、情動に関わる mimiry や発達の初期段階における模倣に中心的関心が置かれており、表出者の表現的表出が解読者の表現的表出に直接影響すると考える。一方、社会言語学者である Giles らによる Communication Accommodation 理論では(例えば、Giles & Smith, 1979; Shepard, et al., 2001)、Byrne(1971)の類似性・魅力の原理を取り入れながら、異文化コミュニケーションにおける言語やアクセントなどの収斂について理論付けている。そこでは、話者は社会歴史的な文脈を参照しながら、誰が優勢な集団であるか判断し、そして、誰が調節して相手に一致させるべきか、または、自分は誰から反収斂させるべきかなど、当該の状況における調節の方向付けを判断するとしている。前者は Figure 1 中の左端に、後者は右端に対応付けることが出来る。

これらに対して長岡(2003)は、反応潜時に関する一連の研究の結果に基づいて、発言行動の時間特性の同調傾向モデルを提案する。このモデルでは、話者は相手の発話様式を参照し、自分の発話様式に取り入れ、自らの反応潜時を産出する。取り入れの段階で相手に対する受容性が影響し、産出の段階で社会的スキルが影響すると考えられる(Figure 2)。このモデルは、上記 2 つのモデル・理論の中庸的存在といえ、また、反応潜時に限らず発話速度や姿勢などにも適用できると推測される。同調傾向がさまざまな社会的な要因の影響を受けることを Hess et al.(1999)では十分に説明するものとは言い難いものに対して、本モデルは、相手に対する受容性や社会的スキルの影響を取り入れているため、社会的な要因の影響を説明することができる。また本モデルは、参照・取り

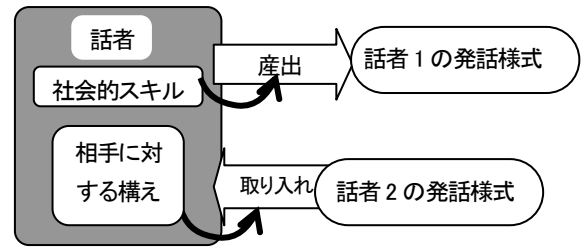


Figure 2 発言行動の時間特性の同調傾向モデル

入れの対象が Communication Accommodation 理論と異なる。結果的に、Communication Accommodation 理論が説明対象とする同調傾向は、話者の所属する文化や地位、階級などの社会における位置づけを伝達するのとは対照的に、本モデルが扱う同調傾向では相手に対する個人的な構えを伝達すると考えられる。これは、言語やアクセントなどの同調傾向が話者の有能性などの社会的な魅力に関連するのに対して、反応潜時の同調傾向は「好きな」「あたたかい」などの個人的な親しみやすさに結びつくことと符号する。このモデルは Figure 1 中、中央に対応付けることができる。このモデルは今後追加や修正を必要とする暫定的モデルではあるが、従来のモデルで説明しにくい部分を説明しようとする点で意義深い。

また、Figure 1 中の 3 区分あるいは 2 区分に、もちろん明確な境界線はない。また、実際の相互作用場面では、この 3 または 2 つの分類のうち、どれか 1 つだけ生じるというのではなく、複数が同時に生じるであろう。また、発達によって、左側を基盤として右側が加わっていくと捉えるのが妥当であろう。

これまで述べたように、同調傾向はこれまで述べてきた多様な要因の影響を受けるが故に、同調傾向は、インタラクションの相手との関係を情緒的、社会認知的などの広い角度から映し出す、インタラクションの副産物といえるかもしれない。同調傾向を意図的に知覚しようとして容易にできるわけではないだろうが、相互作用者が同調傾向を感じ取り相手との関係の指標としてモニターすることができれば、インタラクションをより効果的に運営することが可能であると考えられる。実際、長岡・小森・中村(2003)や 長岡・小森・中村(2002b)から、同調傾向をモニターし行動の調整をすることは、社会的スキルの 1 つであることが示唆されている。

今後は、日常生活でより一般的な対面対話における同調傾向を、マルチチャンネル的な視点で定量的に検討する必要がある。たとえば、2 者間の相互作用における時間的経過の中で、いつ、どのコミュニケーション・チャンネルが同調傾向を示すかを定量的に示す必要があろう。前述のように、同調傾向従来、個別に検討されることがほとんど

どであった。また、今後、言語内容と非言語行動の同調傾向の関連に関して検討されることも必要であると考えられる。

引用文献

- Bates, J. E. 1975 Effects of a child's imitation versus nonimitation on adults' verbal and nonverbal positivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 840-851.
- Berger, C. R., & Bradac, J. J. 1982 *Language and Social Knowledge: Uncertainty in Interpersonal Relations*. London: Edward Arnold.
- Bernieri, F. J., Gillis, J. S., Davis, J. M., & Grahe, J. G. 1996 Dyad rapport and accuracy of its judgment across situations: A lens model analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 110-129.
- Bernieri, F. J., Reznick, J. S., & Rosenthal, R. 1988 Synchrony, pseudosynchrony, and dissynchrony: Measuring the entrainment process in mother-infant interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 243-253.
- Bourhis, R. Y., Giles, H., & Lambert, W. E. 1975 Social consequences of accommodating one's style of speech: A cross-national investigation. *International Journal of the Sociology of Language*, 6, 55-71.
- Byrne, D. 1971 *The Attraction Paradigm*. New York: Academic Press.
- Cappella, J. N. 1981 Mutual influence in expressive behavior: Adult-adult and infant-adult dyadic interaction. *Psychological Bulletin*, 89, 101-132.
- Charny, M. D. 1966 Psychosomatic manifestations of rapport in psychotherapy. *Psychosomatic Medicine*, 28(4), 305-315.
- Chartrand, T. L., & Bargh, J. A. 1999 The chameleon effect: The perception-behavior link and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 893-910.
- Cheng, C.M., & Chartrand, T.L. 2003 Self-monitoring without awareness: Using mimicry as a nonconscious affiliation strategy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 1170-1179.
- Condon, W. S., & Ogston, M. B. 1966 Sound film analysis of normal and pathological behavior patterns. *The Journal of Nervous and Disease*, 143, 338-347.
- Condon, W. S., & Sander, L. S. 1974 Neonate movement is synchronized with adult speech: Interactional participation and language acquisition. *Science*, 183, 99-101.
- 大坊郁夫 1985 对人的コミュニケーションにおける同調傾向—主に音声的行動について— 山形心理学レポート, 4, 1-15.
- 大坊郁夫 1999 同調傾向 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣
- Dimberg, U., & Lundqvist, L. O. 1988 Facial reaction to facial expressions: Sex differences. *Psychophysiology*, 25, 442-443.
- Feldstein, S. 1968 Interspeaker influence in conversational interaction. *Psychological Reports*, 22, 826-828.
- Feldstein, S., & Welkowitz, J. 1978 Conversational congruence: Correlates and concerns. In A. Siegman, & S. Feldstein (Eds.), *Nonverbal Behavior and Communication* (pp.358-378). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Feldstein, S., Dohm, F. A., & Crown, C. L. 2001 Gender and speech rate in the perception of competence and social attractiveness. *Journal of Social Psychology*, 141, 755-806.
- Garvey, C., & BenDebba, M. 1974 Effect of age, sex, and partner on children's dyadic speech. *Child Development*, 45, 1159-1161.
- Genesee, F., & Bourhis, R. 1982 The social psychological significance of code switching in cross-cultural communication. *Journal of Language and Social Psychology*, 1, 1-27.
- Genesee, F., & Bourhis, R. Y. 1988 Evaluative reactions to language choice strategies: The role of socio-structural factors. *Language and Communication*, 8, 229-250.
- Giles, H., & Smith, P. 1979 Accommodation theory: Optimal levels of convergence. In H. Giles, & RN St. Clair (Eds.), *Language and Social Psychology* (pp.45-65). Oxford: Basil Blackwell.
- Gregory, Jr. S. W., Dagan, K. A., & Webster, S. 1997 Evaluating the relation of vocal accommodation in conversation partner's fundamental frequencies to perceptions of communication quality. *Journal of Nonverbal Behavior*, 21, 23-43.
- Gregory, Jr. S. W., Green, B. E., Carrothers, R. M., Dagan, K. A., & Webster, S.W. 2001 Verifying the primacy of voice fundamental frequency in social status accommodation. *Language and Communication*, 21, 37-60.
- Gump, B. B., & Kulik, J. A. 1997 Stress, affiliation and emotional contagion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 305-319.
- Hatfield, E., Hsee, C. K., Costello, J., Weisman, M. S., & Denney, C. 1995 The impact of vocal feedback on emotional experience and expression. *Journal of Social Behavior and Personality*, 10, 293-313.
- Hess, U., Philippot, P., & Blairy, S. 1998 Facial reactions to emotional facial expressions: Affect or cognition? *Cognition and Emotion*, 12, 509-532.
- Hess, U., Philippot, P., & Blairy, S. 1999 Mimicry: Fact and fiction. In P. Philippot, R. S. Feldman, & E. J. Coats (Eds.), *The Social Context of Nonverbal Behavior* (pp.213-241). New York: Cambridge University Press.
- Jaffe, J., & Feldstein, S. 1970 *Rhythms of dialogue*. New York: Academic Press.
- Jasnow, M. D., Crown, C. L., Feldstein, S., Taylor, L., Beebe, B. & Jaffe, J. 1988 Coordinated interpersonal timing of Down-syndrome and nondelayed infants with their mothers: Evidence for a buffered mechanism of social interaction. *Biological Bulletin*, 175, 355-360.
- Jasnow, M. D., & Feldstein, S. 1986 Adult-like temporal characteristics of mother-infant vocal interactions. *Child Development*, 57, 754-761.
- Kendon, A. 1970 Movement coordination in social

- interaction: Some examples described. *Acta Psychologica*, 32, 101-125.
- 吉川肇子 1999 社会的望ましさ 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣
- 吉川肇子 1999 承認欲求 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣
- Klaus, M.H. & Kennell, J.H. 1976 *Maternal-Infant Bonding*. St Louis, MO: Mosby.
- LaFrance, M. 1979 Nonverbal synchrony and rapport: analysis by the cross-lag panel technique. *Social Psychology Quarterly*, 42, 66-70.
- LaFrance, M., & Broadbent, M. 1976 Group rapport: Posture sharing as a nonverbal indicator. *Group and Organization Studies*, 1, 328-333.
- LaFrance, M., & Ickes, W. 1981 Posture mirroring and interactional involvement: Sex and sex typing effects. *Journal of Nonverbal Behavior*, 5, 139-154.
- Lakin, J. L., Jefferis, V. E., Cheng, C.M., & Chartrand, T. L. 2003 The chameleon effect as social glue: Evidence for the evolutionary significance of nonconscious mimicry. *Journal of Nonverbal Behavior*, 27, 145-162.
- Lanzetta, J. T., & Englis, B. G. 1989 Expectations of cooperation and competition and their effects on observers' vicarious emotional responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 543-554.
- Lundqvist, L. O. 1995 Facial EMG reactions to facial expressions: A case of facial emotional contagion? *Scandinavian Journal of Psychology*, 36, 130-141.
- Matarazzo, J. D. 1965 The interview. In B. J. Wolma (Ed.), *Handbook of Clinical Psychology* (pp.403-450). New York: McGrawHill.
- Maurer, R. E., & Tindall, J. F. 1983 Effect of postural congruence on client's perception of counselor empathy. *Journal of Counseling Psychology*, 30, 158-163.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- Meltzoff, A. N., & Moore, M. K. 1994 Imitation, memory, and the representation of persons. *Infant Behavior and Development*, 17, 83-99.
- 長岡千賀 2003 対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者間相互影響 大阪大学大学院人間科学研究科博士学位論文(未公開)
- 長岡千賀・Draguna Raluca Maria・小森政嗣・中村敏枝 2002 音声対話における交替潜時が対人認知に及ぼす影響 ヒューマンインタフェースシンポジウム2002 論文集, 171-174.
- 長岡千賀・小森政嗣・Draguna Raluca Maria・河瀬諭・結城牧子・片岡智嗣・中村敏枝 2003 協調的対話における音声行動の2者間の一致—意見固持型対話と聞き入れ型対話の比較— ヒューマンインタフェースシンポジウム2003 論文集, 167-170.
- 長岡千賀・小森政嗣・中村敏枝 2000 練習が演奏者間の呼吸の一致に及ぼす効果〜ピアノ連弾に関する事例的研究〜 日本心理学会第64回大会発表論文集, 603.
- 長岡千賀・小森政嗣・中村敏枝 2002a 対話における交替潜時の2者間相互影響 人間工学, 38, 316-323.
- 長岡千賀・小森政嗣・中村敏枝 2002b 2者対話における発話時間パターンの類似〜社会的スキルの程度による相違〜 日本心理学会第66回大会発表論文集, 634.
- 長岡千賀・小森政嗣・中村敏枝 2003 音声対話における2者間の相互影響—時間的側面からの検討— 信学技報, 103(113)(HCS2003-6), 19-24.
- Nagaoka, C., Komori, M., Nakamura, T., & Draguna, M. R. 2005 Effects of receptive listening on the congruence of speakers' response latencies in dialogues. *Psychological Reports*, 97, 265-274.
- 内藤哲雄 2001 無意図的模倣の発達社会心理学—同化行動の理論と実証研究— ナカニシヤ出版
- 中村敏枝 1995 『間』における演奏者と伴奏者の呼吸の同期 日本心理学会第59回大会発表論文集, 631.
- 中村敏枝・長岡千賀 同調傾向 大坊郁夫・永瀬治郎(編) 社会言語科学会講座—関係とコミュニケーション— ひつじ書房(印刷中)
- Natale, M. 1975a Convergence of mean vocal intensity in dyadic communication as a function of social desirability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 790-804.
- Natale, M. 1975b Social desirability as related to convergence of temporal speech patterns. *Perceptual and Motor Skills*, 40, 827-830.
- Navarre, D. 1982 Posture sharing in dyadic interaction. *American Journal of Dance Therapy*, 5, 28-42.
- Neumann, R., & Strack, F. 2000 "Mood contagion": The automatic transfer of mood between persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 211-223.
- 小川一美 2003 二者間発話量の均衡が観察者が抱く会話者と会話に対する印象に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 43, 63-74.
- Rogers, C. R. 1957 The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103.
- Scheflen, A. E. 1964 The significance of posture in communication systems. *Psychiatry*, 27, 316-331.
- Schmais, C., & Schmais, A. 1983 Reflecting emotions: the movement-mirroring test. *Journal of Nonverbal Behavior*, 8, 42-54.
- Shepard, C. A., Giles, H., & LePoire, B. A. 2001 Communication accommodation theory. In W. P. Robinson, & H. Giles (Eds.), *The New Handbook of Language and Social Psychology* (pp. 33-56). Chichester, England: Wiley.
- Siegel, E. V. 1995 Psychoanalytic dance therapy: the bridge between psyche and soma. *American Journal of Dance Therapy*, 17, 115-128.
- Sonnby-Borgström, M., Jönsson, P., & Svensson, O. 2003 Emotional, empathy as related to mimicry reactions at different levels of information processing. *Journal of Nonverbal Behavior*, 27, 3-23.
- Staples, F. R., & Sloane, R. B. 1976 Truax factors, speech characteristics, and therapeutic outcome. *The Journal of Nervous and Disease*, 163, 135-140.
- Street, Jr. R. L. 1984 Speech convergence and speech evaluation in fact-finding interviews. *Human Communication Research*, 11, 139-169.
- Tomkins, S. S. 1982 Affect theory. In P. Ekman (Ed.), *Emotion in the Human Face* (pp. 353-395). New York, NY: Cambridge University Press.
- Tong, Y. Y., Hong, Y. Y., Lee, S. L., & Chiu, C. Y. 1999

- Language use as carrier of social identity. *International Journal of Intercultural Relations*, 23, 281-296.
- Vaughan, K. B., & Lanzetta, J. T. 1980 Vicarious instigation and conditionings of facial expressive and automatic responses to a model's expressive display of pain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 909-923.
- Vaughan, K. B., & Lanzetta, J. T. 1981 The effect of modification of expressive displays on vicarious emotional arousal. *Journal of Experimental Social Psychology*, 17, 16-30.
- 渡辺富夫 1998 身体的コミュニケーションにおける引き込み 日本新生児学会雑誌, 34, 734-738.
- 渡辺富夫・大久保雅史・黒田勉 1997 対面コミュニケーションにおける話し手と聞き手との呼吸の引き込み現象の分析評価 計測自動制御学会ヒューマン・インタフェース部会 News and Report, 12, 31-35.
- Welkowitz, J., Cariffe, G., & Feldstein, S. 1976 Conversational congruence as a criterion of socialization in children. *Child Development*, 47, 369-272.
- Welkowitz, J., & Kuc, M. 1973 Interrelationships among warmth, genuineness, empathy, and temporal speech patterns in interpersonal interaction. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 41, 472-473.
- Welkowitz, J., Feldstein, S., Finklestein, M., & Aylesworth, L. 1972 Changes in vocal intensity as a function of interspeaker influence. *Perceptual and Motor Skills*, 35, 715-718.

註

- 1) 本論文は、博士論文(平成 15 年度大阪大学大学院人間科学研究科)の一部に加筆・修正を行ったものである。
- 2) 本稿では、'response latency'の訳語として「反応潜時」を用いる。反応潜時も'switching pause'も話者交替の時間間隔を指す用語であるが、'switching pause'は交替する前に話していた話者に属するのに対して(Jaffe and Feldstein, 1970), 反応潜時は話者交替の後に発話する話者に属している。

Mutual influence of nonverbal behavior in interpersonal communication

Chika NAGAOKA(Graduate School of Education, Kyoto University)

In social interactions, the interactants' nonverbal behavior may synchronize and become similar. In this study, the author called this phenomenon 'synchrony tendency'. Since conventional research about this phenomenon has been conducted from various angles separately, there has been almost no attempt to examine the role of synchrony tendency systematically. In this light, the present study aims at reviewing synchrony tendency based on previous studies from various fields and perspectives.

The synchrony tendency has been observed in various communication channels, and in various forms, such as interspeaker congruence of paralinguistic, convergence of accents in cross-cultural communication, mimicry of other's facial and vocal emotional expressions, neonate imitation, interpersonal synchrony of body movements, entrainment between a neonate's body movement and the flow of an adult's speech. Therefore, this phenomenon has been labeled with various terms, each one having a specific nuance. Moreover, the synchrony tendency is not always observed in all interactions, and it sensitively changes with various factors, such as the interactants' level of empathy and socialization. For example, the results of my experiments indicate that the convergence of response latencies (i.e., latencies before responding to the last utterance of one's partner) in dialogues reflects whether a speaker is receptive to the conversational partner during the dialogue. All these suggest that the synchrony tendency provides an effective indicator reflecting various aspects of our communication behavior.

Various functions of the synchrony tendency in adults' interactions can be inferred from past literature: (a) it facilitates the understanding of an interactional partner's emotions, (b) it conveys empathy and rapport, and (c) it makes the speakers' personality and attitude feel positive. Furthermore, the results of my experiments showed that the synchrony tendency facilitates goal achievement, such as reaching a compromise through discussion (the speakers whose response latencies became similar over the time course to those of their conversational partners evaluated that they reached a compromise).

Past literature along with the results of my own experiments bring to light two aspects of the synchrony tendency: the emotional/automatic/inherent aspect and the cognitive/acquired aspect. Examples that clearly illustrate the former aspect are imitations of facial and vocal emotional expressions and neonate imitation. On the other hand, the cognitive/acquired aspect is illustrated by convergence or congruence of response latencies, vocal intensity, speech duration, language, or accent, and is influenced by social factors.

The above-mentioned aspects of the synchrony tendency match Hess, Philippot, & Blairy (1999)'s mimicry model, Giles et al.'s communication accommodation theory (ex. Shepard, Giles, & LePoire, 2001), as well as the author's speech style convergence model. The speech styles convergence model derived from a series of studies on the convergence of response latencies in dialogues. This model suggests that adopting a partner's speech style and the output cycle between the interactants being influenced by the speakers'

social skills and attitude towards the partner, this cycle develops over the course of the interaction until the speech styles finally converge to a point most suitable for the members of the dyad to progress smoothly through the dialogue.

In the future, it is necessary to investigate quantitatively through which communication channels, and when in the time course of an interaction, the synchrony tendency is displayed.

Keywords: synchrony tendency, nonverbal behavior, emotion, cognition.